

麦作への緑肥作物導入に関する研究 (第4報)

長谷川 浩*・有井秀太*

HASEGAWA, H. & ARII, H. Intercropping of Wheat and Green Manure Crops (IV)

筆者等は、甘藷の麦間挿苗を予定して、小麦を条間1.5尺、複条間3.5尺に作付した場合、その複条間に緑肥ルービンを導入する方式を研究中で、本報では、ルービン刈取期の早晩が小麦の生育収量に及ぼす影響について述べる。

試験方法並に経過概要 黄花ルービンは、早薈甘藷跡地に1954年10月16日、無肥料にて畦間5尺に反当1.5升播とし、その条間に小麦農林61号を11月27日に肥料は反当200貫、硫酸8貫(2貫追肥)、過石8貫、塩加3貫とし、反当3升播とした。ルービンの刈取は4月20日、5月5日、5月20日の3期とし、手にて抜きとつた。小麦は6月2日に刈取つた。1区面積は6.25坪、4反覆のラテン方格法によつた。

ルービンの発芽は採種時の長雨による発芽力の衰えと播種当時の土壤乾燥のため、不齊で、その後の生育も悪く、収量は平年に比し半減した。一方、小麦は発芽並に生育ともに良好で、病害虫の発生はみられなかつた。

成績並に考察 小麦の草丈、稈長にはルービン間作の影響がみられないが、間作区の莖数は4月上旬頃から単作区に比し劣る傾向が認められ、穂数の減少を来した。このような莖数、穂数の減少は、ルービンとの空間競合によるよりはむしろ地下部の競合に基ずくものと考えられる。なお、麦の成熟期は概ね1日間作区がおくれた。

ルービンの収量は刈取のおくれるに伴つて増したが小麦の収量はルービンの4月20日及び5月5日刈取区で差がなく、5月20日刈取区で僅かに減ずる傾向が認められた。このように小麦に対するルービン導入

第1表 小麦成熟期とルービン開花期

区 別	小 麦		ルービン		
	出穂期	成熟期	開花始	開花期	終花期
小麦単作区	月 日 4.12~13	月 日 5.31	月 日 —	月 日 —	月 日 —
ル刈	4月20日	4.12~13	4.10	4.15	5.6
刈	5月5日	4.13	4.9	4.15	5.6
期	5月20日	4.12	4.9	4.15	5.6

* 九州農業試験場

第2表 小麦とルーピンの収量成績（4区平均）

区 別	1) 小 麦				2) ルー ピン	
	子実 重	千粒 重	尺間 穂数	穂長	生草量	
	貫	gm		cm	貫	
小麦単作区	66.9	32.5	70	9.4	—	
ル刈	4月20日	68.4	32.9	62	9.3	112.5
！ 取	5月5日	67.0	32.7	71	9.3	140.4
ン 期	5月20日	64.1	31.9	58	9.5	169.4
間作区平均	66.5	32.5	64	9.4	—	
S.L.D.	0.05	5.3	0.8	14.8	0.3	—
	0.01	8.0	1.3	22.5	0.5	

註：1) 単位は反当貫。2) 地下部を含む。

の影響が軽微であつたのは、ルーピンの生育が不良であつたためと考えられる。なお、5月20日刈取区の小

小麦とルーピンの地上部競合（4月上旬）



麦千粒重は単作区に比し劣つたが、これは登熟期における空間競合に基因するものと考えられる。